

# ポストモダン・ダンスの限界

上林澄雄

1. ジャドソン舞踊劇場に始まるポストモダン舞踊は1950年代のカニンガムが代表的な前衛舞踊の延長で、それ迄のモダンダンスの否定を更に進めた。両者に共通する芸術観は、工業技術の発達と“創造的進化”を認めた楽天的近代主義に基づく。だから人間の物体化・機械化によるニコライスの全体劇場と多媒体抽象の理念を継承し、映画・具体音・電子音楽・録音言語の同時使用、受信器・ビデオ・発動機・登攀用具・索引器材その他の身体装着、各種の機械器具の利用による舞踊は60年代を通じて増え、69年には最高潮に達した。

だが1970年に始まる反公害運動と近代の進歩観への反省の普及は、技術科学による創造的進歩が思想の根拠であるポストモダン派を大きく揺るがせた。

2. そもそも多媒体の同時使用は伝統の舞踊形式とは両立できない。それ故、時間芸術に固有な分節構造（各種の段落をもつ全体の構成法）が否定され、表現内容の統一の関連も・表現形式の様式的完成も・情意の表現＝伝達と観客の伝達内容理解も否定された。さらに民主的平等観による振付者の権威否定と玄人芸（難技）排斥は、プロ以前のアマの日常的な身体運動を規範とし；芸術の権威を引下げて生活と一致させる理想は、様式的運動である舞踊技法を否定するに到った。また庶民の日常から離れた劇場使用を排し、アトリエや美術館や屋外での公演を奨励し、大規模な野外公演は69年に極点に達した。—しかし70年に野外から劇場公演に転向したT.サープの大成と共に、時態は一変したのである。

3. ポストモダン派の伝統破壊・反劇場・反舞踊・無内容・無構成・没形式・反完成の原因は、恣意的な創作態度と自我の創造性発揮とを区別しない誤解にある。だがサープは71年の作品に「芸術に新しさは不可能」との朗読を挿入し；民間舞踊やバレエの技法を活用し、極度の難技と厳密な構造形式を示す傑作を80年まで続々発表した。

ジャドソンの舞踊も末期には構造形式の必要に気づき、単純な目的達成の為の日常動作の反復と僅かな変形を使いだした。そこに主題の展開という時間芸術創作法の萌芽があるが；もともと「プロセスの美術」を舞踊に移入しただけの発想による方法論なので、完全な作舞法に到らず、作品の完成度はあり得ない。—しかし'72年からのL.ディーンは単純な自転・跳躍・足踏みが題名の初歩的な舞踊技法の反復と変形の作品以来、既成の民俗舞踊の作舞法を利用する方向を続けてゆく。

情意の表現と伝達も、64年以来M.モンクとK.

キングが断片的に使い始め、前者は衣裳・装置・小道具その他の演劇的要素の活用を続け；後者は66年の「私は反肉体」との朗読入りの作品以来、意識・観念・思惟・英智の領域を内容に定め、身体運動よりも朗読が中心の作品を続けた。

4. 70年からポストモダン舞踊の代表者はみな反芸術・反舞踊の指導理念を訂正してゆく：それ迄の伝達内容の否定者の作品に、自分の経験の回想談や自叙伝が文字投影・録音・朗読・セリフ・演技を通じて表出される。専門的職業人にふさわしい舞踊技法の使用が加わり、難技の頻出度が増大する。舞踊と音響の無関係な同時併存の作品が減り、作曲と作舞に共有される時間芸術の構造と形式が重視されだし、既成曲や古典音楽による作品も増えてゆく。

この推移に応じてポストモダン（近代以後）の語義も、“近代以上に近代的”な新しさを指さず、正反対の“近代以前こそ現代的”という前近代志向と反近代を意味する根本的な逆転を蒙った（その一例が、近代建築を否定して前近代建築の伝統回復を説く77年のC.ジュニングズ著『ポストモダンの建築言語』）。

5. こうしてポストモダン舞踊が60年代の様式だったことが明らかになる。大学の革命・青年の叛乱・黒人の暴動・反戦抗議などのエスタブリッシュメント（体制）破壊の時代風潮を支持する舞踊の時代様式がそれだったのである。バレエもポストモダン派の手法（巨大なビニール袋の膨張や舞踊手への映画投影）を取入れ、教育舞踊家さえも近代至上の急進的前衛の舞踊観を支持・心奉した（65年の『ダンス・スコープ』誌創刊号参照）。

これに対して70年代の舞踊は、創造を絶対化した近代主義の誤りを排し、伝統を現在に生かす折衷主義（バレエでは所謂“新古典主義”）に移り、ヴェトナム以後の時代様式となった。この年代は政府の助成金も働いて「舞踊の爆発」と呼ばれる盛期を出現させた。—だが黄金時代は持続しない。80年の『ブラームスのパガニーニ』の緻密な形式美の完成品発表以後、サープは殺到する振付依頼に応じて、俄かに粗製濫造を始めた。その他の旧ポストモダン派の中で70年代に引退しなかった者も、70年代後半の観客増大による需要や助成金に依存して佳作を発表したが、その質は80年代に入って低下の一路を辿るかのようだ……。

本論の参考資料は、文中言及の他、M.シーゲルとA.クローチェの舞踊批評集が主要。なおRoger Copeland: Postmodernism & the Repudiation of Primitivism, Partisan Review, 1983は、ポストモダン舞踊の崩壊を近代至上主義が内蔵する自己矛盾に基づくとする点において、私見に近い。